

●Google+(グーグルプラス)

・Google+とは?

実名などの個人情報登録を前提としていないこと以外基本的にはFacebookと同じようなサービスです。重要な違いは情報を発信する相手をグループ分けできる「サークル」機能の存在があげられます。

・何に使うか

この「サークル」機能は、例えば、会社、家族、友達、というようなグループを作るといいますが、実際に使ってみると、発信する情報の内容により「サークル」の構成メンバーを選定していくようになります。たとえばある趣味に特化した「サークル」や同姓だけの「サークル」などです。これにより特定の情報について深い情報交換を行うことができます。

●3つのサービスの使い分け

これらのサービスを使い分けるためには、基本的に情報の発信者としてのスタンスで考えていく必要があります。ですから、特に積極的に発信をする気がない人は、どれか一つのサービスをやっているだけでいいでしょう。

ではまずTwitterですが、これは自分の情報を不特定多数に届けるためのものです。そしてそれに対する返信の義務は無いので、コミュニケーションは偶然的返事に期待する程度となります。反面、大反響があったり、有名人から返事があつたりするともうれいしいです。

Facebookは顔見知りの親密なネットワークの全員に向かって情報を発信するもので、情報の信頼性が高く、また、常識的な範囲の情報が中心となるでしょう。

Google+は不特定多数でもなく、仲間内でもない、見知らぬ人との濃密な情報交換を行うことができます。ある分野に特化した「サークル」を作ることにより高度な情報収集ツールになる可能性があります。そうなるには、相手にも「サークル」の一員と認めてもらう必要があるため自身の情報発信スキルが問われる

こととなります。つまり、Google+は上級者向けと言えるかもしれません。

●ネットの世界の「デジタルライフ」

ソーシャルメディアを利用し始めると、それまでとは比べ物にならないくらいの人とコミュニケーションをとるようになるため、現実の人間関係のように一人ひとりに気を使っていたのでは続けられませんが、ネットの世界ではできるだけ気を使わずに、有益な情報を交換したいと思うようになります。それには、現実の世界のコミュニケーションにこだわらず、発信する情報の性質に合わせたコミュニケーションを形成していく必要があります。自分の発信したい情報がどんな人たちに届くのか。この点だけに気を配ることで余計なストレスを軽減でき、また相手からの反応が良くなるため、コミュニケーションをより楽しむことができます。

◆Facebookは何を儲けているのか?

利用するのにお金のかからないFacebookは、どうやって儲けているのでしょうか。結論から言えば広告収入です。Facebookは八億人の個人情報を持っていて、それは年齢から趣味嗜好に至る詳細な情報です。これをもちに広告を打ちたい企業は相手をピンポイントで絞り込むことができます。さらに、この八億人のユーザーはただのユーザーではありません。実名を世界に公開して積極的にコミュニケーションを楽しむ人々はそれなりに実生活が充実している人たちです。アメリカではFacebookを始めきつかけとして大学への入学があげられます。大学に行けない人たちはSNSから離れていくというデータもあります。大卒でそれなりに実生活が充実した八億の中から、個人の嗜好に合わせた広告が打てる環境というのがどれだけ魅力的か。結果、アメリカのネット広告の三分の一がFacebookに拠出されています。

# 都市で生物多様性を考える

櫻井 高志

弊社の業務の多くは都市計画に関わるプラン検討や調査だが、ここ数年環境分野の業務も数を増やしている。環境基本計画をはじめ、温暖化対策関連の検討、里山保全の調査、3Rの普及啓発支援などである。緑地という点では、都市公園の計画も手がけている。

里山

生物多様性の代表格といえる「里山」。日本国土の四割が里地里山だったと言われている。里山は生活の糧を得るために人が手を加えてきた二次林だが、燃料革命以降は利用目的がなくなってしまうために管理放棄され、今では元々の里山の環境が失われつつある状況だ。

調査で携わった里山もその典型だった。離れて見れば、まとまった立派な緑ののだが、近づけば森は暗く、ヤブが茂り、竹林が浸食し、不法投棄や害獣の温床となるなど、生物多様性の低下だけでなく、ある種迷惑施設と化していた。

環境分野において、これからのキーワードは「温暖化対策」と「生物多様性」の二つだろう。特に、先に開催されたCOP10のテーマであった生物多様性への関心は日に日に高まっている。行政では、生物多様性地域戦略を策定する自治体が着々と増え、名古屋市も策定するとともに、「なごや生物多様性センター」を設置した。民間でも企業独自の「生物多様性宣言」の策定や、生物多様性に配慮した市街地開発なども進められ、官民ともに活動に深く取り込まれつつある。

今後のまちづくりにおいても、当然、密に関係するため、今までの経験から、今後の役割を考えてみた。

都市公園

都市公園の緑の役割には、景観形成、ヒートアイランドの緩和、心理的效果など種々あるが、生物多様性の効果については今まであまり議論してこなかった。しかし、最近では都市でも生物多様性に配慮した緑地を配置して、まちの価値を上げようという動きもあり、関心は高い。かつては維持管理の手間やコスト削減を背景に、緑を極力配置しない公園を設計したこともあったが、身近な公園だからこそ、住民への訴求という点からも生物多様性の視点を取り入れていくことが今後は重要ではないかと感じている。

川・ため池

川やため池などの水辺は、生物多様性にとって欠かせない存在である。エコトーンなどの環境変化が生き物の種類を増やし、沿川の緑や河畔林はコリドーとして、生き物の移動経路の役割を果たす。私は地元で天白・川辺の楽校というNPOに所属し、天白川の自然観察や調査などに携わっている。天白川は市内では環境は良好なほうだが、実態は河川改修によって人工化され、水質もいまいち、外来種も棲み、冷静に見れば本来の川の姿とはかけ離れている。また、住民も散歩や花見などで川の外の利用は多く行われているのだが、川の中や生き物まではまだまだ関心は向いていない。

かつての里山のように質の高い環境にしていくには、適切な管理（手入れ）を恒常的に行っていくことが大前提になる。そのためにも、それぞれの地域に応じた現代版の里山利用価値を見出し、資源・経済が循環するしくみを構築することが重要なのだが、どの里山も苦戦しているのが実情だ。里山周辺だけで考えても答えはなかなか出ないため、都市部との関係の中でそのしくみをデザインしていくことがキーだと感じている。これからは都市部のまちづくりを扱う際にも、視野広く郊外にある里山を意識した取り組みを取り入れていきたいものである。

川やため池などの水辺は、生物多様性にとって欠かせない存在である。エコトーンなどの環境変化が生き物の種類を増やし、沿川の緑や河畔林はコリドーとして、生き物の移動経路の役割を果たす。私は地元で天白・川辺の楽校というNPOに所属し、天白川の自然観察や調査などに携わっている。天白川は市内では環境は良好なほうだが、実態は河川改修によって人工化され、水質もいまいち、外来種も棲み、冷静に見れば本来の川の姿とはかけ離れている。また、住民も散歩や花見などで川の外の利用は多く行われているのだが、川の中や生き物まではまだまだ関心は向いていない。

里山同様、日常生活と切り離され、身近だが遠い存在というのが課題だと感じている。土木分野とも連携した意識啓発等の取り組みを担えればと感じている。

都市と生物多様性

都市化と生物多様性は相反するものがある。しかし、都市部への人口集中が進み、また集約型市街地形成と市街地縮退が議論されている中では、都市部の人間こそが生物多様性に配慮する意識を持ち、都市と郊外を一体的に捉えて、自然を構成する各要素の役割を見直し、生物多様性の確保に動き出していくことが重要だと考える。

今後のまちづくりコンサルタントの役割としても、新たな価値観として登場した生物多様性を都市デザインや都市計画の中にきつちりと落とし込み、かつ新たなまちの魅力として人々へ訴求していくことが求められているのではないだろうか。



天白川で毎年夏に開かれる自然体験会。1年でもっとも多くの子ども達でにぎわう。